

巻頭言

我々はどこから来たのか？ 我々は何者なのか？ 我々はどこへ行くのか？ —総合人間学の諸課題にふれつつ—

Where Do We Come from? Who Are We? Where Are We Going?

尾関 周二

OZEKI, Shuji

本学会は、昨年、設立 10 周年を迎えたが、設立準備に直接かかわった者として、少し振り返りながら、「総合人間学」ということで今後取り組んでいくべき方向性・課題について思う所を少し述べてみたい。

本学会の設立趣意書をみると、概ね以下のようなことが語られている。現代が地球環境問題を始めとして様々な「世界的問題」を提起しており、危機が深刻化している。そして、その問題と危機は人間みずから作り出したものであり、従って、いまこそ人間そのものとは何かを問う必要がある。しかし、諸学問は 20 世紀初頭以来大きく発展してきているが、ますます細分化して全体像が見えにくくなっている。人間をめぐる認識に関しても専門化され細分化された知識は蓄積されてきているが、かえって全体像は見えにくくなってきている。こういうなかで諸学問の学際的な協力のもとに人間の総合的な探求にとりかかる必要がある。

ここから窺えるように、本学会は現代世界、現代日本の現実的な問題状況を念頭において探求することを課題としている。この点は、いわゆる「哲学的人間学」や多くの「〇〇人間学」ということを掲げ

て語られる人間学とは違う点であろう。本学会の発足はこういった現代社会と学問のあり方についての危機意識を深く背景にもっていることを忘れてはならないのである。

このことは昨年の大会の記念フォーラムの際に設立当時の状況を話題にするなかで、学会設立以前の準備段階の研究会から学会設立に至るテーマ設定の変化・動向のなかにこういったことが見られることが話題になった。現代への問題意識と比較的無関係に人間本性論について語られていたあり方から次第に現代の問題状況を意識するとともに、学問のあり方への批判的反省を通じて、これとのかかわりにおいて人間本性論への問いかけを深化していったことが準備過程で見られるのである。

繰り返しになるが、「人間とは何か」或いは人間本性の解明は、現代の人類や日本国民が直面する深刻な問題状況と、(たとえ表現として直接的な言及がないにせよ、) 無関係になされてはならないという問題意識が本学会の大きな特徴であると思われる。

それは、私なりに表現すれば、近現代文明(社会・文化)と人間本性の解明を共に重視しているということであろう。20 世紀後半の環境・エコロジ

一問題など様々な世界的問題の生起によって人類史700万年のうちたかだか4,500年前に始まった近代文明(社会)は、積極面はあるにせよ、深いところで人間本性に適合していないのではないかという直観を手掛かりに、文明や人間本性を改めて諸学問の協力によって解明しようというのが創設者を始めとする設立にかかわった多くの人々の問題意識ではなかったかと私なりに理解している。

さて、上記のような問題意識を背景にして、設立に際して中心的な役割を果たされたお二人のうち、憲法学者の小林直樹氏は、法的人間学的問題、暴力と欲望の問題に関心を集中され、それらを体系的に考察された。また、もう一人の動物学者の小原秀雄氏は、「ペット化」という現代人のあり方に至る人類の「発展」の仕方に関心をもち、この過程を「自己家畜化」(自己人為淘汰)という仕方で特徴づけた。私はお二人から多くのことを学んだが、同時にもう一步突っ込んで議論すべき論点があるのではと思ったこともある。

そのうちのひとつは、つまり、お二人の創設者が明示的に問題にされなかったテーマとして「資本主義」の問題性があるのではないかと思った。とくに人類史的視点からして、お二人が指摘された「欲望の肥大化」と「自己人為淘汰」のあり方に資本主義を基軸とする近代文明の登場は決定的な変化をもたらしたことの意味があまり解明されていないのではないかと思ったのである。おそらく当時まだ、ソ連社会主義圏の崩壊、いわゆる「資本主義の勝利」という余韻が色濃く広くあったことを配慮されたこともあったのであろう。

それを考えると興味深いのは、2008年のリーマンショックが起こってから、あたかもタブーが破れたかのように、資本主義についての批判的言及が

「資本主義の終焉」(水野和夫)、「資本主義の崩壊」(中谷巖)、「ポスト資本主義」(広井良典)などと公然と様々な論者、とりわけ資本主義を礼賛していた論者からも語られるようになったことである。明らかに時代状況は変化しているのである。フランシス・フクヤマの「歴史の終焉」論は色褪せ、資本主義の終焉、脱資本主義が語られる状況が出てきたのである。

そしてさらに、3・11フクシマ原発震災が起こって以降、私は日本の「国のかたち」のみならず、やはり近現代文明と人間本性が深く問われていることを強く実感し、「原子カムラ」と呼ばれた癒着構造は、まさに、近現代文明の負の諸側面の融合を象徴しているものと考えた。近代文明の構成要素として、科学技術、国民国家、市場経済があるが、これらの絡み合いのなかで近代文明の原動力である資本主義が生み出され、また逆にそれらの要素は資本主義によって浸透されて、相乗的に「成長」をつくりだし今日の危機を引き起こしてきたと考えた(共編著『環境哲学のラディカリズム』学文社、2012)。

もちろん、近代文明批判は資本主義批判に還元できないが、しかし、同時にまた原動力である資本主義批判抜きにして近代文明批判を原理的・包括的になすことができないことも確かと思われるのである。

そして、資本主義を問題にするには、著名なフランスの歴史学者のフェルナン・ブローデルも『物質文明・経済・資本主義』で指摘しているように、資本主義システムはわれわれの日常生活(物質文明)における経済活動から立ち上がってくる。そのことを考えると、日常生活を構成する主要な活動である労働(人間と自然の物質代謝)とコミュニケーション(交通)のあり方に関して、人類史の貫通的な考察とともに近代文明生成の際にそれらを構成要素と

する生活過程がどのように変容したのかが考察されねばならないであろう。そして、資本主義システムは一旦「世界システム」として成立すると、それ以前の社会システム・制度と違ってそれは人間の欲望を媒介の中軸にしながらも、貨幣の自己増殖という独自の論理で様々な社会文化的諸要素を再編成しながら拡大再生産していくシステムといえよう。脱資本主義の探求は経済学的考察にとどまらない人間学的考察が必要なのである。

さて、初代会長の小林直樹氏がしばしば好んで口にされた言葉は、ゴッガン（Gogh）の有名な大作のタイトルでもある「我々はどこから来たのか？ 我々は何者なのか？ 我々はどこへ行くのか？」である。このゴッガンの畢生の大作は良く知られているように、彼の晩年にタヒチのマオリ族の神話を念頭に自らの世界観を具象化して描いたものといわれる。この絵は、ゴッガンが自らの心のなかの「野性」を見つめるなかで、ヨーロッパ近代文明への批判的問いかけを秘めたものであろう。（『ゴッガン手稿 タヒチ・ノート』美術公論社、1987年、参照。）

このなかには、三つの問いかけがあるが、最後の「我々はどこへ行くのか？」という未来への問いかけは、本学会ではその内実はあまり語られては来なかったのではないだろうか。しかし、このゴッガンのフレーズは、第一の人間の起源への問いかけ、第二の人間本性への問いかけをふまえて、第三の「我々はどこへ行くのか」即ち、人間の未来への問いかけが重要なのではないだろうか。（じつは思い起こせば、本学会誌の創刊号のタイトルは『人間はどこにいくのか』であったのだが。）

「我々はどこへ行くのか」という問いも様々なレベル・理解が可能であるが、ここでの話の流れから

いうと、近現代文明・社会の危機と閉塞感を乗り越えて、新たな文明や社会はどう構想されるのか、という問いとして理解することができよう。そしてまた、その構想は人間本性の理解を不可欠に前提することになるろう。

ここで、私なりに総合人間学会が今後議論すべき試みとして提案してみたいのは、未来の社会・文明について自由に構想して議論してみることである。そのテーマが興味深いのは、文明論と人間本性論を結合して問題にする点である。しかも、未来の探求はわれわれ自身の未来であることによって、多かれ少なかれ実践的な意欲や意義を背景にもつものである。確かにこの議論は、いわゆる「科学的」な議論ではないし、また厳密な意味で学問的な議論にもならないかもしれない。しかし、それは、現代の世界的問題の認識や現代文明の問題性理解や人間観の共有をはかることにつながるとともに、自ずと各自の専門分野や関心・経験を背景にして語られることによって各自の様々な差異が現れ出るとともに、相互理解をうながしていくことになるろう。

その一例として、ごく簡単に私なりの未来の文明・社会の構想を少し語ってみたい。（より詳細には、昨秋発刊した拙著『多元的共生社会が未来を開く』を参照されたい。）

さて、今日、科学技術の発展による「成長戦略」とともに、完全自動運転の自動車の開発やロボットを利用したより一層効率的で便利な生活が語られる。さらにはまた、人間の脳と人工知能の融合で人間の「生物的限界」を超えていくことを提唱する論者も現れている。農業に関しても、「垂直農業（vertical farm）」と呼ばれる都会の高層ビル全体を食料生産工場としようというアイデアも語られる。こういった工業化や都市化を一層促進する将来社会として

の超工業化社会の方向は、人間本性に合致するものであろうか。

また、将来社会としての「脱工業化社会」が語られる場合には、しばしば高度化した「情報化社会」、「知識社会」が語られる。もともと「脱工業化社会」という問題提起は、米国の社会学者ダニエル・ベルによって1962年に提起されたが、その後の未来学者アルビン・トフラーなども『第三の波』(1980)という世界的に話題になった本で、第一の波の農業社会、第二の波の工業化社会に続く、第三の波を情報化社会として主張した。しかし、はたして脱工業化社会は、知識や情報やサービスが中心になる社会であらうか。

これらの考えに対して私は、上述の拙著で、脱近代・脱資本主義の将来社会とそこへ向けての転換のプロセスの基軸に〈農〉を位置づける構想を提起してみた。これはかつてのソ連型社会主義の変革論も含めて、従来のいろいろな将来社会論や社会変革論にはなかった構想であると思っている。ちなみに、ここでの〈農〉とは、単に農業だけでなく、広く農・林・漁を含む生存のために自然に直接働きかける生態系に位置づく生産・生活・文化の様式を意味しており、現代の「工業型農業」を含むものではない。〈農〉は食料生産のみならず、国土や自然環境の保全、良好な景観の形成・維持、多様な文化の伝承などの多面的価値をもつのである。

こういった〈農〉を基軸にした持続可能な社会、もう少し具体的にいえば、環境保全型農業や自然エネルギーを基礎にした広義の地産地消的な地域コミュニティの世界的ネットワークという未来社会の構想である。これが、近現代社会・文明がもたらした人間・自然の様々な抑圧・破壊といった負の面を克服し人間本性に合致した未来社会・文明をつくりあ

げていくのではないかと提起した。

私がこのように〈農〉を強調することは、工業や都市を否定することではなく、「農工共生」や「農村都市共生」によって工業や都市を変容させ自然生態系システムの循環のなかに適正に位置づけることが重要だということなのである。これまで科学技術、特に情報通信技術（ICT）は工業化社会を推進するために活用されてきたが、むしろ上記のような位置づけの視点において活用すべきであらう。

〈農〉の強調は、人びとが日常生活において自然（植物・動物等）との関わりにおいて生活することによって、生命レベルでの相互作用によって人間の生命体としての感受性を取り戻すことの重要性とも関係している。今日、農業・農村への関心や回帰を示している「市民農園」「週末農業」「有機農業」

「産直」「帰農」「田舎暮らし」等々の言葉は、単に表層的な関心ではなく、こういった生命体としての人間の深層の動きを示しているのではないだろうか。

〈農〉の復権は、当面の日本の農業や地域の危機に対応するだけでなく、大きく文明の転換につながっていくものと考えているのである。

私は新たな文明を「エコロジー文明」「農工共生文明」などと呼んできたが、これはまた上記との関係では、小原秀雄氏の「〈ナチュラルな〉」という言葉を使用して「〈ナチュラルな〉文明」と呼ぶこともできている。

私はこういった構想が、さきの拙著を書き終えてから、19世紀後半のイギリスで活躍したウィリアム・モリスのいわゆる「田園社会主義」の構想に近いのではと思うようになった。モリスは日本では「アーツ&クラフト運動」の指導的芸術家、装飾工芸家でよく知られているが、じつはマルクスの『資本論』にも通じた社会主義者でもあった。

モリスの将来社会の構想は、『ユートピアだより』という本で語られるが、目覚めてみるとモリスらしき主人公は19世紀末から200年後の世界にいますという想定で話が始まるのである。テムズ河沿いに船で村々を訪ね人びとと交わり生活を経験するなかでモリスが理想とする未来社会と人間を描き出した物語である。じつは、これは、エドワード・ベラミ（1850-1898）の19世紀末米国でベストセラーとなったユートピア小説『かえりみれば—2000年より1887年』（1888）を批判する意図でもって書かれたのである。ベラミは当時の米国での貧富の拡大や悲惨さを憂えて、『かえりみれば』というユートピア小説を書いた。そこで語られた未来社会では、確かに資本家はおらず、すべての人々が平等な生活を営んでいるが、高度な科学技術を背景に国家によって人びとは産業隊に組織・管理されて働くのであり、いわば「国家社会主義」と呼べるようなあり方である。（じつはこれはその後のロシア革命によって生まれたソ連型社会主義にそっくりであった。）

これに対して、モリスは「国家へのきわめて徹底した中央集権化によって動かされている国家共産主義」として批判して、彼の構想する社会主義を『ユートピアだより』において描いたのである。モリスの原点は「労働の喜び」であり、労働の苦痛を機械によって軽減することは賛成であるが、機械の発展によって労働をなくしていくことには反対であった。人間的な労働を通じて「生活の芸術化」や対自然、対人間関係を生き生きとしたものにしていくことが目的であった。明らかにモリスとベラミでは科学技術の役割や人間本性の捉え方が違っていたのである。（ウィリアム・モリスの「社会主義」やユートピア思想との関係について詳しくは、拙稿『『多元的共生社会が未来を開く』補論—ウィリアム・モリスの

社会主義を考える』『環境思想・教育研究』9号、2016年を参照）

以上述べてきたように、文明論や人間本性論をそれぞれ学問的に議論していくことも重要であるが、未来の社会・文明を議論することは、構想力を交えてその両方を合わせて考えていくことで一層興味深いではなからうか。構想力（想像力）こそが人間を人間たらしめたという洞察を思い起こすことができる（哲学者の三木清、霊長類学者の松沢哲郎など）。学会として未来への問いかけ、探求を重要な課題のひとつとすることは、未来に向かってこれから立ち向かおうとする若い人々に一層関心をもたせる学会となるのではなからうか。

最後にもう一言だけ述べておけば、今日話題になっている「文系学部廃止論」が提起する問題も、未来に向かって、科学技術の研究教育が社会のなかで、また学問全体のなかで、どういう位置を占めるのが、人間的な社会のあり方、人間本性に適合しているか（〈ナチュラルな〉あり方なのか）という、ここで述べてきたような視点からも議論できるし、またしなければならぬのである。

[おぜき しゅうじ／本学会副会長・東京農工大学
名誉教授／哲学]